

パネルディスカッション：魅せるサービス、輝く資料

コーディネーター：宇陀則彦（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科）

パネリスト：北本朝展（国立情報学研究所情報基盤研究系）

杉原太郎（北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科）

曾我麻佐子（龍谷大学理工学部情報メディア学科）

綿拔豊昭（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科）

今日、デジタルアーカイブという用語は一般化し、その意義や必要性が認知され始めてきた。実際、研究対象である資料のデジタル化・保存・流通・共有化のための多様な研究が活発に推進され、時空間データベースや資源共有化など、実用的なシステムの構築が始まっている。人文科学は実用の学問にあらず、という考え方はもはや過去のものとなった。本パネルディスカッションでは、資料に潜在する可能性（ポテンシャル）をより深く広く探るためには、単なるデジタル技術の追求を越えて、人間と社会への貢献を見据えた「サービス」としての技術を強く目指すことがひとつの鍵となると考え、多様な観点から議論を行う。

パネリスト

北本朝展 KITAMOTO Asanobu

1997 年東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻修了。博士（工学）。現在は国立情報学研究所コンテンツ科学研究系准教授。もともとの専門は画像処理や画像データベース等で、デジタル・シルクロード・プロジェクトにも当初は画像処理担当要員として加わったが、現在はプロジェクト全体に関与。本業（？）としての地球科学データのアーカイブも含め、異分野の研究者との共同研究と、各種データを「使える」サービスとして公開することを積極的に進めている。

杉原太郎 SUGIHARA Taro

1998 年徳山高専機械電気工学科卒業。2000 年同専攻科機械制御工学専攻修了。2002 年京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士前期課程修了。2005 年同博士後期課程修了。博士（工学）。同年 4 月より北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科助手。2007 年より助教。学生時代は、感性情報処理に関する研究に従事。現在は、ユーザ行動分析を専門とし、介護・教育・医療の現場において ICT 機器が与える影響についての調査、MOT 教育の効果測定、社会人学生の指導を通して企業活動の調査を行っている。

曾我麻佐子 SOGA Asako

2004 年名古屋大学大学院人間情報学研究科博士後期課程修了。学術博士。同年 4 月龍谷大学理工学部助手。2007 年同大学助教。2007 年 10 月～2008 年 3 月 EPFL VRLab 客員研究員。第 1 回デジタルコンテンツシンポジウム船井賞受賞。ダンスと CG アニメーションに関する研究に従

事。バレエ自動振付システム、新体操 3D ルールブック、Virtual Dance Theatre などを開発。

綿拔豊昭 WATANUKI Toyooki

中央大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得、退学。現在、筑波大学大学院図書館情報メディア研究科教授。現在の研究対象は、書籍を通して見た日本の伝統文化。研究成果として、単著に『膝栗毛はなぜ愛されたか』『連歌とは何か』（ともに講談社）『伊達政宗の文芸』（大崎八幡宮）、共編に『近代日本礼儀作法書誌事典』『絵で見る明治・大正礼儀作法事典』（ともに柏書房）『加賀料理人舟木伝内編著集』（桂書房）などがある。

コーディネーター

宇陀則彦 UDA Norihiko

1989 年図書館情報大学卒業。1994 年筑波大学大学院博士課程工学研究科電子・情報工学専攻修了。博士（工学）。同年 4 月図書館情報大学助手。現在は筑波大学大学院図書館情報メディア研究科准教授。一貫して電子図書館システムの研究に従事。2005 年より筑波大学附属図書館研究開発室の室員となり、電子図書館サービスの開発・運用に関わる。並行して道法會元における護符分析支援システムの構築など、デジタル資料の活用に関する研究を行う。近年の関心事は電子図書館サービスに対する利用者の認知過程や行動調査の結果をシステム設計に反映させることである。

今回パネルディスカッションを企画した意図は 2 つある。一つは異分野の研究者を集め、人文科学研究の多様性を示し、人文科学のポテンシャルを示すこと。もう一つは「サービス」を接点に議論を行うことで異分野の研究者に共通のプロトコルを与え、資料の持つ意味や価値に

ついて考察することである。パネリストだけでなく、フロアからの意見を積極的に受け、活発なディスカッションを演出したい。